

# 安井夫人

森鷗外

青空文庫



「仲平ちゆうへいさんはえらくなりなさるだろう」という評判と同時に、「仲平ちゆうへいさんは不男ぶおとこだ」という蔭言かげごとが、清武きよたけ一郷いちげうに伝えられている。

仲平の父は日向国ひゆうがのくに宮崎郡清武村に二段八畝たんせほどの宅地があつて、そこに三棟の家を建てて住んでいる。財産としては、宅地を少し離れた所に田畑を持っていて、年来家で漢学を人の子弟に教えるかたわら、耕作をやめずにいたのである。しかし仲平の父は、三八のとき江戸へ修行に出て、中一年なかおいて、四十のとき帰国してから、だんだん飢肥おび藩で任用せられるようになったので、今では田畑の大部分を小作人に作らせることにしている。仲平は二男である。兄文治ぶんじが九つ、自分が六つするとき、父は兄弟を残して江戸へ立つたのである。父が江戸から帰つた後、兄弟の背丈せたけが伸びてからは、二人とも毎朝書物を懐中して畑打はたうちに出た。そしてよその人が煙草たばこ休みをする間、二人は読書に耽ふけつた。

父がはじめて藩の教授にせられたころのことである。十七八の文治と十四五の仲平とが、例の畑打ちに通うと、道で行き逢あう人が、皆言い合わせたように二人を見較べて、連れがあれば連れに何事をかささやいた。背の高い、色の白い、目鼻立ちの立派な兄文治と、背の低い、色の黒い、片目の弟仲平とが、いかにも不吊ふつり合あいな一対に見えたからである。兄

弟同時にした瘡瘡ほうそうが、兄は軽く、弟は重く、弟は大痘痕おおあばたになって、あまつさえ右の目がつぶれた。父も小さいとき瘡瘡をして片目になっているのに、また仲平が同じ片羽かたわになったのを思えば、「偶然」というものも残酷なものだと言うほかない。

仲平は兄と一しよに歩くのをつらく思った。そこで朝は少し早目に食事を済ませて、一足さきに出、晩は少し居残つて為事しごとをして、一足遅れて帰つてみた。しかし行き逢う人が自分の方を見て、連れとささやくことはやまなかつた。そればかりではない。兄と一しよに歩くときよりも、行き逢う人の態度はよほど不遠慮になって、ささやく声も常より高く、中には声をかけるものさえある。

「見い。きようは猿がひとりで行くぜ」

「猿が本を読むから妙だ」

「なに。猿の方が猿引きよりはよく読むそうな」

「お猿さん。きようは猿引きはどうしましたな」

交通の狭い土地で、行き逢う人は大抵識り合つた中であつた。仲平はひとりで歩いてみて、二つの発明をした。一つは自分がこれまで兄の庇護ひごのもとに立っていないながら、それを悟らなかつたということである。今一つは、驚くべし、兄と自分とに渾名あだながついていて、

醜い自分が猿と言われると同時に、兄までが猿引きと言われているということである。仲平はこの発明を胸に蔵めて、誰にも話さなかったが、その後は強いて兄と離れ離れに田畑へ往反しようとはしなかった。

仲平にさきだつて、体の弱い兄の文治は死んだ。仲平が大阪へ修行に出て篠崎小竹の塾に通つていたときに死んだのである。仲平は二十一の春、金子十両を父の手から受け取つて清武村を立つた。そして大阪土佐堀三丁目の蔵屋敷に着いて、長屋の一間を借りて自炊をしていた。儉約のために大豆を塩と醤油とで煮ておいて、それを飯の菜にしたのを、蔵屋敷では「仲平豆」と名づけた。同じ長屋に住むものが、あれでは体が続くまいと気がかつて、酒を飲むことを勧めると、仲平は素直に聴き納れて、毎日一合ずつ酒を買つた。そして晩になると、その一合入りの徳利を紙撚で縛つて、行燈の火の上に吊るしておく。そして燈火に向つて、篠崎の塾から借りて来た本を読んでいるうちに、半夜人定まったころ、燈火で尻をあぶられた徳利の口から、蓬々として蒸気が立ちのぼつて来る。仲平は巻をおいて、徳利の酒をうまそうに飲んで寝るのであった。中一年おいて、二十三になつたとき、故郷の兄文治が死んだ。学殖は弟に劣つていても、才気の鋭い若者であつたのに、とかく病気で、とうとう二十六歳で死んだのである。仲平は訃音を得て、すぐに大阪

を立つて帰った。

その後仲平は二十六で江戸に出て、古賀こが侗庵どうあんの門下に籍をおいて、昌平しょうへい黌こうに入った。後世の註疏ちゅうそによらずに、ただちに経義を窮めようとする仲平がためには、古賀より松崎まつき謙堂けんどうの方が懐かしかったが、昌平黌に入るには林か古賀かの門に入らなくてはならなかったのである。痘痕あはたがあつて、片目で、背の低い田舎書生は、ここでも同窓に馬鹿にせられずには済まなかつた。それでも仲平は無頓着に黙り込んで、独り読書に耽ふけっていた。坐右ざゆうの柱に半折はんせつに何やら書いて貼はつてあるのを、からかいに来た友達が読んでみると、「今は音を忍ねが岡おかの時ほととぎす鳥ねいつか雲井うんせいのよそに名のらむ」と書いてあつた。「や、えらい抱負ほうふじゃぞ」と、友達は笑つて去つたが、腹の中ではやや気味悪くも思つた。これは十九のとき漢学わんがくに全力を傾注するまで、国文をも少しばかり研究した名残なごりで、わざと流儀違りゅうぎちがひいの和歌の真似をして、同窓の擲揄やくに酬むくいたのである。

仲平はまだ江戸にいるうちに、二十八で藩主の侍読にせられた。そして翌年藩主が帰国せられるとき、供をして帰つた。

今年の正月から清武村字中野あせに藩の学問所が立つことになって、工事の最中である。それが落成すると、六十一になる父滄洲翁そうしゅうおうと、去年江戸から藩主の供をして帰つた、二

十九になる仲平さんが、父子ともに講壇に立つはずである。そのとき滄洲翁が息子によめを取ろうと言いだした。しかしこれは決して容易な問題ではない。

江戸がえり、昌平鬢じこみと聞いて、「仲平さんはえらくなりなさるだろう」と評判する郷里の人たちも、痘痕あはたがあつて、片目で、背の低い男ぶりを見ては、「仲平さんは不男こだ」と蔭言かげごとを言わずにはおかぬからである。

滄洲翁は江戸までも修業に出た苦勞人である。倅せがれ仲平が学問修行も一通り出来て、来年は三十になろうという年になつたので、ぜひよめを取つてやりたいとは思ふが、その選択のむずかしいことには十分気がついている。

背こそ仲平ほど低くないが、自分も痘痕があり、片目であつた翁は、異性に対する苦い経験を嘗なめている。識ならぬ少女と見合いをして縁談を取りきめようなどということは自分にも不可能であつたから、自分と同じ欠陥があつて、しかも背の低い仲平がために、それが不可能であることは知れている。仲平のよめは早くから気心を識り合つた娘の中から選び出すほかない。翁は自分の経験からこんなことをも考へている。それは若くて美しいと思われた人も、しばらく交際していて、智慧ちえの足らぬのが暴露してみると、その美貌びぼうはい

つか忘れられてしまう。また三十になり、四十になると、智慧の不足が顔にあらわれて、昔美しかった人とは思われぬようになる。これとは反対に、かおかたち顔貌にはきず疵があつても、才人だと、交際しているうちに、その醜さが忘れられる。また年を取るにしたがつて、才気が眉目をさえ美しくする。仲平なぞもただ一つの黒い瞳をきらつかせて物を言う顔を見れば、立派な男に見える。これは親のひいきめ鼻眞目ばかりではあるまい。どうぞあれが人物を識つた女をよめにもらつてやりたい。翁はぎつとこう考えた。

翁は五節句や年忌に、互いに顔を見合う親戚の中で、未婚の娘をあれかこれかと思ひ浮べてみた。一番華やかで人の目につくのは、十九になる八重という娘で、これは父が定じやう府ふを勤めていて、江戸の女を妻に持つて生ませたのである。江戸風の化粧をして、江戸詞ことばをつかつて、母に踊りをしこまれている。これはもらおうとしたところであつてもなく、また好ましくもない。形が地味じみで、心の気高い、本も少しは読むという娘はないかと思つてみても、あいにくさういう向きの女子は一人もない。どれもこれも平凡きわまつた女子ばかりである。

あちこち迷つた末に、翁の選択はどうとう手近い川かわ添ぞえの娘に落ちた。川添家は同じ清武村のおあき大字今泉、こあき小字岡にある翁の夫人の里方で、そこに仲平のいとこ従妹が二人ある。妹娘



の佐代は十六で、三十男の仲平がよめとしては若過ぎる。それに器量よしという評判の子で、若者どもの間では「岡の小町」と呼んでいるそうである。どうも仲平とは不吊合いなように思われる。姉娘の豊なら、もう二十で、遅く取るよめとしては、年齢の懸隔もはなはだしいというほどではない。豊の器量は十人並みである。性質にはこれといって立ち優つたところはないが、女にめずらしく快活で、心に思うままを口に出して言う。その思うままがいかに素直で、なんのわだかまりもない。母親は「臆面なしで困る」と言うが、それが翁の気に入っている。

翁はこう思い定めたが、さてこの話を持ち込む手続きに窮した。いつも翁に何か言われると、謹んで承るといふ風になつてゐる少女らに、直接に言うことはもちろん出来ない。外舅外姑が亡くなつてからは、川添の家には卑属しかいないから、翁がうかと言ひ出しては、先方で当惑するかも知れない。他人同士では、こういう話を持ち出して、それが不調に終つたあととは、少くもしばらくの間交際がこれまで通りに行かぬことが多い。親戚間であつてみれば、その辺に一層心を用いなくてはならない。

ここに仲平の姉で、長倉のご新造と言われている人がある。翁はこれに意中を打ち明けた。「亡くなつた兄いさんのおよめになら、一も二もなく来たのでございませうが」

と言いかけて、ご新造は少しためらった。ご新造はそういう方角からはお豊さんを見ていなかったのである。しかしお父うさまに頼まれた上で考えてみれば、ほかに弟のよめに相応した娘も思い当らず、またお豊さんが不承知を言うにきまつているとも思われぬので、ご新造はどうとう使者の役目を引き受けた。

川添の家ではひなまつり雛祭の支度をしていた。奥の間へいろいろな書附けをした箱を一ぱい出し散らかして、その中からお豊さんが、だいらさま内裏様やらごにんばや五人囃しやら、一つひとつ取り出して、綿や吉野紙を除けて置き並べていると、妹のお佐代さんがちよいちよい手を出す。「いいからわたしに任せておおき」と、お豊さんは妹を叱しかっていた。

その障子をあけて、長倉のご新造が顔を出した。手にはみやげに切らせて来たひもも緋桃の枝を持つている。「まあ、お忙しい最中でございますね」

お豊さんはじょうば尉嬢の人形を出して、ほうきくまで箒と熊手とを人形の手に挿さしていたが、その手を停めて桃の花を見た。「おうちの桃はもうそんなに咲きましたか。こちらのはまだつぼみ蒼あざがずつと小そうございます」

「出かけに急いだもんですから、ほんの少しばかり切らせて来ました。たくさんお活いけに

なるなら、いくらでも取りにおよこしなさいよ」こう言つてご新造は桃の枝をわたした。

お豊さんはそれを受け取つて、妹に「ここはこのままそっくりしておくのだよ」と言つておいて、桃の枝を持つて勝手へ立つた。

ご新造はあとからついて来た。

お豊さんは台所の棚たなから手桶ておけをおろして、それを持つてそばの井戸端に出て、水を一釣ひとつ瓶びん汲み込んで、それに桃の枝を投げ入れた。すべての動作がいかにもかいがいしい。使命しめいを含んで来たご新造は、これならば弟のよめにしても早速役に立つだろうと思つて、微笑を禁じ得なかつた。下駄を脱ぎすてて台所にあがつたお豊さんは、壁に吊つてある竿の手拭いで手をふいている。そのそばへご新造が摩すり寄つた。

「安井では仲平におよめを取ることにになりました」劈へきとう頭に御新造は主題どうはを道破した。

「まあ、どこから」

「およめさんですか」

「ええ」

「そのおよめさんは」と言いさして、じつとお豊さんの顔を見つ、 「あなた」

お豊さんは驚きあきれた顔をして黙つていたが、しばらくすると、その顔に笑えみがたた

えられた。「嘘うそでしょう」

「本当です。わたしそのお話をしに来ました。これからお母あさまに申し上げようと思つています」

お豊さんは手拭いを放して、両手をだらりと垂たれて、ご新造と向き合つて立つた。顔からは笑みが消え失せた。「わたし仲平さんはえらい方だと思つていますが、ご亭主にするのはいやでございます」冷然として言い放つた。

お豊さんの拒絶があまり簡明に発表せられたので、長倉のご新造は話のあとを継ぐ余地を見いだすことが出来なかつた。しかしこれほどの用事を帯びて来て、それを二人の娘の母親に話さずにも帰られぬと思つて、直談じきだん判をして失敗した顛てん末まつを、川添のご新造にざつと言つておいて、ギヤマンのコップに注いで出された白酒を飲んで、暇いとま乞こいをした。

川添のご新造は仲平びいき鼻び眞まだつたので、ひどくこの縁談の不調を惜しんで、お豊にしつかり言つて聞かせてみたいから、安井家へは当人の軽率な返事を打ち明けずにおいてくれと頼んだ。そこでお豊さんの返事をもつて復命することだけは、一時見合わせようと、長倉のご新造が受け合つたが、どうもお豊さんが意ひるがえを翻ひるがえそうとは信ぜられないので、「どうぞ

無理にお勧めにならぬように」と言い残して起つて出た。

長倉のご新造が川添の門を出て、道の二三丁も来たかと思うとき、あとから川添に使われている下男の音吉が駆けて来た。急に話したいことがあるから、ご苦労ながら引き返してもらいたいという口上を持って来たのである。

長倉のご新造は意外の思いをした。どうもお豊さんがそう急に意を翻したとは信ぜられない。何の話であろうか。こう思いながら音吉と一しよに川添へ戻つて来た。

「お帰りがけをわざわざ呼び戻したして済みません。実は存じ寄らぬことが出来まして」待ち構えていた川添のご新造が、戻つて来た客の座に着かぬうちに言った。

「はい」長倉のご新造は女主人の顔をまもっている。

「あの仲平さんのご縁談のことでございますね。わたくしは願うてもないよい先だと存じますので、お豊を呼んで話をいたしてみました、やはりまいられぬと申します。そういたすとお佐代が姉にその話を聞きました、わたくしのところへまいって、何か申しそうにいたして申さずにおりますのでございます。なんだえと、わたくしが尋ねますと、安井さんへわたくしが参ることは出来ずまいかと申します。およめに往くということはどういうわけのものか、ろくにわからずに申すかと存じまして、いろいろ聞いてみましたが、あ

ちらでもろうてさえ下さるなら自分は往きたいと、きつぱり申すのでございます。いかにも差出がましいこととございまして、あちらの思わくもいかがとは存じますが、とにかくあなたにご相談申し上げたいと存じまして」さも言いにくそうな口吻くちふりである。

長倉のご新造はいよいよ意外の思いをした。父はこの話をするとき、「お佐代は若過ぎる」と言った。また「あまり別品でなあ」とも言った。しかしお佐代さんを嫌きらっているのではないことは、平生からわかっている。多分父は吊合いを考えて、年がいついていて、器量の十人並みなお豊さんと望んだのであろう。それに若くて美しいお佐代さんが来れば、不足はあるまい。それにしても控え目で無口なお佐代さんがよくそんなことを母親に言ったものだ。これはとにかく父にも弟にも話してみても、出来ることなら、お佐代さんの望み通りにしたいものだ。と、長倉のご新造は思案してこう言った。「まあ、そうでございますか。父はお豊さんをと申したのでございますが、わたくしがちよつと考えてみますに、お佐代さんでは悪いとは申さぬだろうと存じます。早速あちらへまいって申してみることにはいたしましょう。でもあの内気うちきなお佐代さんが、よくあなたにおっしゃったものでございませぬ」

「それでございます。わたくしも本当にびつくりいたしました。子供の思っていることは

何から何までわかっているように存じていまして、大違いでございます。お父うさまにお話し下さいますなら、当人を呼びまして、ここで一応聞いてみることにいたしましょう」  
 こう言つて母親は妹娘を呼んだ。

お佐代はおそるおそる障子をあけてはいった。

母親は言つた。「あの、さつきお前の言つたことだがね、仲平さんがお前のようなものでももらつて下さることになつたら、お前きつと往くのだね」

お佐代さんは耳まで赤くして、「はい」と言つて、下げていた頭を一層低く下げた。

長倉のご新造が意外だと思つたように、滄洲翁も意外だと思つた。しかし一番意外だと思つたのは婿殿むこどのの仲平であつた。それは皆怪訝かいがするとともに喜んだ人たちであるが、近所の若い男たちは怪訝するとともに嫉そねんだ。そして口々に「岡の小町が猿のところへ往く」と噂うわさした。そのうち噂は清武一郷に伝播でんぱして、誰一人怪訝せぬものはなかつた。これは喜びや嫉そねみの交じらぬただの怪訝であつた。

婚礼は長倉夫婦の媒ばい妁しやくで、まだ桃の花の散らぬうちに済んだ。そしてこれまでただ美しいとばかり言われて、人形同様に思われていたお佐代さんは、繭まゆを破つて出た蛾がのよ

うに、その控え目な、内気な態度を脱却して、多勢おおぜいの若い書生たちの出入りする家で、天晴あつぱれ地歩を占めた夫人になりおおせた。

十月に学問所の明教堂が落成して、安井家の祝筵しゆくえんに親戚故旧が寄り集まったときには、美しく、しかもきつぱりした若夫人の前に、客の頭が自然に下がった。人にかかわれる世間のよめさんとは全く趣をことにしていたのである。

翌年仲平が三十、お佐代さんが十七で、長女須磨すまこ子こが生まれた。中一年おいた年の七月には、藩の学校が飢肥おびに遷うつされることになった。そのつぎの年に、六十五になる滄洲翁は飢肥しんとくとうの振徳堂しんとくとうの総裁にせられて、三十三になる仲平がその下で助教を勤めた。清武の家は隣にいた弓削ゆげという人が住まうことになって、安井家は飢肥かちの加茂かちに代地をもらった。仲平は三十五のとき、藩主の供をして再び江戸に出て、翌年帰った。これがお佐代さんがやや長い留守に空閨くうけいを守ったはじめである。

滄洲翁は中風で、六十九のとき亡くなった。仲平が二度目に江戸から帰った翌年である。仲平は三十八のとき三たび江戸に出て、二十五のお佐代さんが二度目の留守をした。翌年仲平は昌平さいちやう齋さい長ちやうになった。ついで外桜田の藩邸の方でも、仲平に大番所おおばんしょ番ばん



頭しら という役を命じた。そのつぎの年に、仲平は一旦帰国して、まもなく江戸へ移住することになった。今度はいずれ江戸に居いどころ所がきまつたら、お佐代さんをも呼び迎えるという約束をした。藩の役をやめて、塾を開いて人に教える決心をしていたのである。

このころ仲平の学殖はようやく世間に認められて、親友にも塩谷しおのやとういん岩陰いんのような立派な人が出来た。二人一しよに散歩をすると、男ぶりはどちらも悪くても、とにかく背の高い塩谷が立派なので、「塩谷一丈雲腰に横たわる、安井三尺草頭かしらを埋む」などと冷やかされた。

江戸に出ているも、質素な仲平は極端な簡易生活をしていた。帰り新参で、昌平黌の塾に入る前には、千駄谷にある藩の下しもやしき邸ていにいて、その後外桜田の上邸かみにいたり、増上寺境内の金地院こんじいんにいたりしたが、いつも自炊である。さていよいよ移住と決心して出てからも、一時は千駄谷にいたが、下邸に火事があったから、はじめて五番町の売居うりすえを二十九枚で買った。

お佐代さんと呼び迎えたのは、五番町から上二番町の借家に引き越していたときである。いわゆる三計けいじゆく塾じゆくで、階下に三畳やら四畳半やらの間が二つ三つあって、階上かみが斑竹はんちく山房さんぼうの匾額へんがくを掛けた書齋である。斑竹山房とは江戸へ移住するとき、本国田野村字仮か

屋の虎斑竹を根こじにして来たからの名である。仲平は今年四十一、お佐代さんは二十八である。長女須磨子について、二女美保子、三女登梅子と、女の子ばかり三人出来たが、かりそめの病のために、美保子が早く亡くなったので、お佐代さんは十一になる須磨子と、五つになる登梅子とを連れて、三計塾にやって来た。

仲平夫婦は当時女中一人も使っていない。お佐代さんが飯炊きをして、須磨子が買物に出る。須磨子の日向訛りが商人に通ぜぬので、用が弁せずにご帰ることが多い。

お佐代さんは形ふりに構わず働いている。それでも「岡の小町」と言われた昔の倅はどこやらにある。このころ黒木孫右衛門というものが仲平に逢いに来た。もと飢肥外浦の漁師であつたが、物産学にくわしいため、わざわざ召し出されて徒士になった男である。お佐代さんが茶を酌んで出しておいて、勝手へ下がったのを見て狡猾なような、滑稽なような顔をして、孫右衛門が仲平に尋ねた。

「先生。只今のはご新造さままでござりまするか」

「さよう。妻で」恬然として仲平は答えた。

「はあ。ご新造さまは学問をなさりましたか」

「いいや。学問というほどのことはしておりませぬ」

「してみますと、ご新造さまの方が先生の学問以上のご見識でござりますな」

「なぜ」

「でもあれほどの美人でおいでになって、先生の夫人におなりなされたところを見ますと」  
仲平は覚えす失笑した。そして孫右衛門の無遠慮なような世辞を面白がって、得意の策  
棋るしの相手をさせて帰した。

お佐代さんが国から出た年、仲平は小川町に移り、翌年また牛込見附外の家を買った。  
値段はわずか十両である。八畳の間に床の間と廻り縁まわえんとがついていて、ほかに四畳半が一  
間、二畳が一間、それから板の間が少々ある。仲平は八畳の間に机を据えて、周囲に書物  
を山のように積んで読んでいる。このころは霊岸島の鹿島屋清兵衛が蔵書を借り出して来  
るのである。一体仲平は博涉家はくしやうかでありながら、蔵書癖ぞうしよへきはない。質素で濫費をせぬから、  
生計に困るようなことはないが、十分に書物を買うだけの金はない。書物は借りて覽みて、  
書き抜いては返してしまう。大阪で篠崎の塾に通ったのも、篠崎に物を学ぶためではなく  
て、書物を借るためであった。芝の金地院に下宿したのも、書庫をあさるためであった。  
この年に三女登梅子が急病で死んで、四女歌子が生まれた。

そのつぎの年に藩主が奏者になられて、仲平におしあいかた押合方という役を命ぜられたが、目が悪いと言つてことわつた。薄暗い明りで本ばかり読んでいたので實際目がよくなかつたのである。

そのまたつぎの年に、仲平は麻布あざぶ長坂裏通りに移つた。牛込から古家を持つて来て建てさせたのである。それへ引き越すとすぐに仲平は松島まで観風旅行をした。浅葱あさぎ織おり色いろ木綿もめんの打裂ぶつさき羽織ばおりに裁附たつつけ袴かまで、腰こしに銀ぎん拵ごしらえの大小を挿し、菅笠すげがさをかむり草鞋わらじをはくという支度である。旅から帰ると、三十一になるお佐代さんがはじめて男子を生んだ。のちに「岡の小町」そつくりの美男になつて、今きん文尚ぶんしょう書しよ二十九篇で天下を治めようと言つた才子の棟蔵とうぞうである。惜しいことには、二十二になつた年の夏、暴瀉ぼうしゃで亡くなつた。

中一年おいて、仲平夫婦は一時上邸の長屋に入つていて、番町ばんちよう袖振坂そでふりざかに転居した。その冬お佐代さんが三十三で二人目の男子謙助を生んだ。しかし乳が少いので、それを雑ぞ司谷うしがやの名主方なぬしかたへ里子にやつた。謙介は成長してから父に似た異相の男になつたが、後日安東益齋と名のつて、東金、千葉の二箇所ふたところで医業をして、かたわら漢学を教えているうちに、持ち前の肝積かんしゃくのために、千葉で自殺した。年は二十八であつた。墓は千葉町大

日寺にある。

浦賀へ米艦が来て、天下多事の秋となつたのは、仲平が四十八、お佐代さんが三十五のときである。大儒息軒先生として天下に名を知られた仲平は、ともすれば時勢の旋渦せんかの中に巻き込まれようとしてわずかに免れていた。

飢肥藩では仲平を相談中そうだんちゆうという役にした。仲平は海防策を献じた。これは四十九のときである。五十四のとき藤田東湖と交わつて、水戸景山公に知られた。五十五のときペルリが浦賀に来たために、攘夷封港論じやういほうこうろんをした。この年藩政が気に入らぬので辞職した。しかし相談中をやめられて、用人格というものになつただけで、勤め向きは前の通りであった。五十七のとき蝦夷開拓論えぞかいたくろんをした。六十三のとき藩主に願つて隠居した。井伊閣老が桜田見附で遭難せられ、景山公が亡くなられた年である。

家は五十一のとき隼町はやぶさちように移り、翌年火災に遭つて、焼け残りの土蔵や建具を売り払つて番町に移り、五十九のとき麴町善国寺谷に移つた。辺務へんむを談ぜないということを書いて二階に張り出したのは、番町にいたときである。

お佐代さんは四十五のときにやや重い病氣をして直ったが、五十の歳暮からまた床について、五十一になった年の正月四日に亡くなった。夫仲平が六十四になった年である。あとは男子に、短い運命を持った棟蔵と謙助との二人、女子に、秋元家の用人の倅田中鉄之助に嫁して不縁になり、ついで塩谷の媒介で、肥前国島原産の志士中村貞太郎、仮名北有馬太郎に嫁した須磨子と、病身な四女歌子との二人が残った。須磨子は後の夫に獄中で死なれてから、お糸、小太郎の二人の子を連れて安井家に帰った。歌子は母が亡くなつてから七箇月目に、二十三歳であとを追つて亡くなった。

お佐代さんはどういう女であつたか。美しい肌おびあがたむらあざほしくらに粗服をまどつて、質素な仲平に仕えつゝ一生を終つた。飢肥吾田村字星倉こふせから二里ばかりの小布瀬こふせに、同宗の安井林平という人があつて、その妻のお品さんが、お佐代さんの記念だと言つて、木綿縞もめんじまの袷あわせ一枚持つている。おそらくはお佐代さんはめつたに絹物などは着なかつたのだろう。

お佐代さんは夫に仕えて労苦を辞せなかつた。そしてその報酬には何物をも要求しなかつた。ただに服飾の粗に甘んじたばかりではない。立派な第宅ていたくにおりたいとも言わず、結構な調度を使いたいとも言わず、うまい物を食べたがりも、面白い物を見たがりもなかった。

お佐代さんが奢侈しやしを解せぬほどおろかであったとは、誰も信ずることが出来ない。また物質ぶつしつ的にも、精神的にも、何物をも希求せぬほど恬澹てんたんであったとは、誰も信ずることが出来ない。お佐代さんにはたしかに尋常でない望みがあつて、その望みの前には一切の物が塵芥ちりあくたのごとく卑しくなつていたのであろう。

お佐代さんは何を望んだか。世間の賢い人は夫の榮達を望んだのだと言つてしまふだろう。これを書くわたくしもそれを否定することは出来ない。しかしもし商人が資本をおろし財利を謀はかるように、お佐代さんが労苦と忍耐とを夫に提供して、まだ報酬を得ぬうちに亡くなつたのだと言ふなら、わたくしは不敏にしてそれに同意することが出来ない。

お佐代さんは必ずや未来に何物をか望んでいただろう。そして瞑目めいもくするまで、美しい目の視線は遠い、遠い所に注がれていて、あるいは自分の死を不幸だと感ずる余裕をも有せなかつたのではあるまいか。その望みの対象をば、あるいは何物ともしかと弁識していなかつたのではあるまいか。

お佐代さんが亡くなつてから六箇月目に、仲平は六十四で江戸城に召された。また二箇月目に徳川將軍に謁見えつけんして、用人席にせられ、翌年兩番上席にせられた。仲平が直参じきさん

になったので、藩では謙助を召し出した。ついで謙助も昌平黌出役になったので、藩の名跡は安政四年に中村が須磨子に生ませた長女系に、高橋圭三郎けいざぶろうという婿むこを取って立てた。しかしこの夫婦は早く亡くなった。のちに須磨子の生んだ小太郎が継いだのはこの家である。仲平は六十六で陸奥塙むつはなわ六万三千九百石の代官にせられたが、病気を申し立てて赴任せずに、小普請入りこぶしんいをした。

住いは六十五のとき下谷徒士町したやかちまちに移り、六十七のとき一時藩の上邸に入っていて、麴町一丁目半蔵門外の壕端ほりばたの家を買って移った。策士雲井龍雄くもいたつおと月見をした海嶽楼かいがくろうは、この家の二階である。

幕府滅亡の余波で、江戸の騒がしかった年に、仲平は七十で表向き隠居した。まもなく海嶽楼は類焼したので、しばらく藩の上邸や下邸に入っていて、市中の騒がしい最中に、王子在領家村りょうけむらの農高橋善兵衛が弟政吉の家にひそんだ。須磨子は三年前に飢肥おびへ往ったので、仲平の隠家へは天野家から来た謙助の妻淑子よしこと、前年八月に淑子の生んだ千菊せんぎくとがついて来た。産後体の悪かった淑子は、隠家に来てから六箇月目に、十九で亡くなった。下総しもとうさにいた夫には逢わずに死んだのである。



仲平は隱家に冬までいて、彦根藩の代々木邸に移った。これは左<sup>さ</sup>伝<sup>でん</sup>輯<sup>しゅう</sup>釈<sup>しゃく</sup>を彦根藩で出版してくれた縁故からである。翌年七十一で旧藩の桜田邸に移り、七十三のときまた土<sup>ど</sup>手<sup>て</sup>三番町に移った。

仲平の亡くなったのは、七十八の年の九月二十三日である。謙助と淑子との間に出来た、十歳の孫千菊が家を継いだ。千菊の夭<sup>よう</sup>折<sup>せつ</sup>したあとは小太郎の二男三郎が立てた。

大正三年四月



# 青空文庫情報

底本：「日本の文学 3 森鷗外（二）」中央公論社

1972（昭和47）年10月20日発行

入力：真先芳秋

校正：日隈美代子

1998年8月6日公開

2006年5月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 安井夫人

## 森鷗外

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>